

国際政治・外交史

著書

【一般】

| | | |
|----------------------------|------------------------------------|--------------|
| 赤木 完爾、国際安全保障学会（編著） | 国際安全保障がわかるブックガイド | 慶應義塾大学出版会 |
| 浅羽 祐樹 | 比較のなかの韓国政治 | 有斐閣 |
| 阿部 浩己 | 揺動する国境・平和・人権 | 信山社 |
| アンドレ・グンダー・フランク（著）、山下 範久（訳） | リオリエントーアジア時代のグローバル・エコノミー〔新版〕 | 藤原書店 |
| 五十嵐 隆幸、大澤 傑（編著） | 米中対立と国際秩序の行方—交叉する世界と地域 | 東信堂 |
| 石井 貢太郎（編著） | 独裁主義の国際比較 | ミネルヴア書房 |
| 石井 貢太郎 | 非民主主義の政治学 | ミネルヴア書房 |
| 石田 淳、長有 紀枝、山田 哲也（編） | 国際平和論—脅威の認識と対応の模索 | 有斐閣 |
| 石津 朋之 | 軍事史としての第一次世界大戦—西部戦線の戦いとその戦略 | 中央公論新社 |
| 石津 朋之 | 戦争とロジスティクス | 日経BP日本経済新聞出版 |
| 伊藤 誠 | 資本主義の多重危機 | 岩波書店 |
| 稻田 十一 | 国際開発協力レジーム論—制度・規範とその政治過程 | 有信堂高文社 |
| 今井 慶宗 | 戦争犠牲者に対する援護に関する研究—社会福祉と法制の両面から | 大学教育出版 |
| 岩崎 正洋（編著） | コロナ化した世界—COVID-19は政治を変えたのか | 勁草書房 |
| 上野 貴弘 | グリーン戦争—気候変動の国際政治 | 中央公論新社 |
| 上野 千鶴子、江原 由美子（編） | 挑戦するフェミニズム—ネオリベラリズムとグローバリゼーションを超えて | 有斐閣 |
| 植村 秀樹 | 平和国家の戦争論—今こそクラウゼヴィッツ『戦争論』を読む | 流通経済大学出版会 |
| 内海 成治、桑名 恵、杉田 映理（編） | 国際協力を学ぶ人のために | 世界思想社 |

| | | |
|--|---------------------------------------|--------------|
| エマニュエル・エシュト、ピエール・セルヴァン（監修）, 義江 真木子（訳） | 殺戮の世紀1914-2014—世界を変えた20の戦争 | 新評論 |
| エミール・シンプソン（著）,吉田 朋正（訳） | 21世紀の戦争と政治—戦場から理論へ | みすず書房 |
| 太田 昌克 | 核クライシス—瓦解する国際秩序 | ハヤカワ新書 |
| 岡倉 古志郎 | 死の商人—戦争と兵器の歴史 | 講談社学術文庫 |
| 岡田 実 | 冷戦終結からウクライナ戦争へ—ドイツ統一、ソ連崩壊の原点から考える | 文芸社 |
| 岡本 雅享、上村 英明、窪 誠、朴 金優綺、朴 君愛 | マイノリティ・ライツ—国際規準の形成と日本の課題 | 現代人文社 |
| 小川 浩之、板橋 拓己、青野 利彦 | 国際政治史—主権国家体系のあゆみ | 有斐閣ストゥディア |
| 小倉 和夫 | 外交秘録—表と脇と裏舞台 | 論創社 |
| 小野 圭司 | 戦争と経済—舞台裏から読み解く戦いの歴史 | 日経BP日本経済新聞出版 |
| カール・フォン・クラウゼヴィッツ（著）,加藤 秀治郎（訳） | 全訳戦争論 上・下 | 日経BP日本経済新聞出版 |
| 加藤 朗、大中 真（編著） | 国際学の先端研究—「準」周辺からみた英國学派の国際社会論 | 桜美林大学出版会 |
| 川口 雄一 | 南原繁—「戦争」経験の政治学 | 北海道大学出版会 |
| 君塚 直隆 | 君主制とはなんだろうか | 筑摩書房 |
| 京都大学大学院人間・環境学研究科（編） | 学問で平和はつくれるか? | 京都大学学術出版会 |
| 黒井 文太郎 | 工作・謀略の国際政治—世界の情報機関とインテリジェンス戦 | ワニブックス |
| グローバル・ガバナンス学会（編）,中村 登志哉、小尾 美千代、首藤 もと子、山本 直、中村 長史（責任編集） | ウクライナ戦争とグローバル・ガバナンス | 芦書房 |
| ケビン・ラッド（著）,藤原 朝子（訳） | 避けられる戦争—米中危機が招く破滅的な未来 | 東京堂出版 |
| 小泉 康一 | 難民と人道主義—原則と政治の葛藤を超えて | 勁草書房 |
| 高坂 正堯 | 平和と危機の構造 | 中公文庫 |
| 国際経済連携推進センター（CFIEC）（編） | 揺らぐ国際秩序と混迷する世界—崩壊寸前の戦後国際規範 | 産経新聞出版 |
| 国際文化会館地経学研究所（編） | 経済安全保障とは何か | 東洋経済新報社 |
| 小阪 真也 | 国際刑事法廷の「遺産」—「積極的補完性」の軌跡と展開 | 晃洋書房 |
| 小林 守（編著） | グローバル化と国際危機管理に関する諸問題—異文化リスクとパンデミックリスク | 白桃書房 |

| | | |
|---------------------------------------|------------------------------------|-----------|
| 今野 茂充 | 国際安全保障－基本的な問いにどう答えるか | 春風社 |
| 坂元 茂樹 | 国際法で読み解く外交問題 | 東信堂 |
| 阪本 拓人、キハラハント愛（編） | 人間の安全保障－東大駒場15講 | 東京大学出版会 |
| ジェイムズ・カー＝リンゼイ、ミクラス・ファブリー（著）, 小林 紗子（訳） | 分離独立と国家創設－係争国家と失敗国家の生態 | 白水社 |
| 芝崎 厚士 | グローバル関係の思想史－万有連関の世界認識研究へ | 晃洋書房 |
| 清水 奈名子、藤井 広重（編） | 探究の国際学－複合危機から学際的な研究を考える | ナカニシヤ出版 |
| ジョセフ・M・シラキューサ（著）, 栗田 真広（訳） | 核兵器 | 創元社 |
| 進藤 榮一 | 現代国際関係学－歴史・思想・理論 | 花伝社 |
| 進藤 榮一 | 現代紛争と軍拡構造－非極紛争から軍産官複合体へ | 花伝社 |
| 進藤 榮一 | 非極の世界像－地殻変動の思想へ | 花伝社 |
| 菅原 出 | 民間軍事会社－「戦争サービス業」の変遷と現在地 | 平凡社 |
| 鈴木 一人 | 資源と経済の世界地図 | PHP研究所 |
| スティーブン・レビツキー、ダニエル・ジブラット（著）, 濱野 大道（訳） | 少数派の横暴－民主主義はいかにして奪われるか | 新潮社 |
| 高橋 和則 | エドマンド・バークの国制論 | 法政大学出版局 |
| 高橋 琢磨 | 通貨霸権の興亡 | 日本実業出版社 |
| 詫摩 佳代 | グローバル感染症の行方－分断が進む世界で重層化するヘルス・ガバナンス | 明石書店 |
| 多湖 淳 | 国際関係論 | 勁草書房 |
| 田所 昌幸、相良 祥之（著） | 国際政治経済学 [第2版] | 名古屋大学出版会 |
| 田中 琢二 | 経済危機の100年－「危機なき世界」は実現するのか | 東洋経済新報社 |
| 田中 美知太郎 | 戦争と平和－田中美知太郎政治・哲学論集 | 中央公論新社 |
| 土田 陽介 | 基軸通貨－ドルと円のゆくえを問い合わせなおす | 筑摩書房 |
| 鶴岡 路人 | はじめての戦争と平和 | ちくまプリマ－新書 |
| 東京大学法学部「現代と政治」委員会（編） | 東大政治学 | 東京大学出版会 |
| 徳原 悟（著）, 拓殖大学アジア情報センター（編） | 国際収支 | 勁草書房 |

| | | |
|---|-----------------------------------|--------------|
| 永井 陽之助 | 永井陽之助国際政治論集 1・2 | 中央公論新社 |
| 中井 遼 | ナショナリズムと政治意識—「右」「左」の思い込みを解く | 光文社 |
| 中川 淳司、米谷 三以（編著） | 企業の技術戦略と国際公共政策 | 文眞堂 |
| 中島 真志 | Swift—グローバル金融ネットワークの全貌 | 東洋経済新報社 |
| 中西 寛、飯田 敬輔、安井 明彦、川瀬 剛志、岩間 陽子、刀 祢館 久雄、日本経済研究センター（編著） | 漂流するリベラル国際秩序 | 日経BP日本経済新聞出版 |
| 中野 敏男 | 継続する植民地主義の思想史 | 青土社 |
| 中溝 和弥、佐橋 亮（編） | 世界の岐路をよみとく基礎概念—比較政治学と国際政治学への誘い | 岩波書店 |
| 西村 成弘 | 日米グローバル経営史—企業経営と国際関係のダイナミズム | 法律文化社 |
| 長谷川 将規 | 安全保障のための経済手段 | 日本経済評論社 |
| バリー・ブザン、オーレ・ヴェーヴァ、ヤーブ・デ・ウィル デ（著），今井 宏平、上野 友也、川久保 文紀、塚田 鉄也、 西海 洋志（訳） | 「安全保障化」とは何か—脅威をめぐる政治力学 | ミネルヴァ書房 |
| 一橋法学・国際関係学レクチャーシリーズ刊行委員会（編） | 教養としての法学・国際関係学—学問への旅のはじまり | 国際書院 |
| ブルース・W・ジェントルスン（著），本多 美樹（訳） | 制裁—国家による外交戦略の謎 | 白水社 |
| 古谷 知之、伊藤 弘太郎、佐藤 丙午（編） | ドローンが変える戦争 | 勁草書房 |
| ポール・エドワーズ（著），堤 之智（訳） | 気候変動社会の技術史—気候モデルと観測データと国際政治 | 日本評論社 |
| 細谷 雄一、板橋 拓己（編著） | 民主主義は甦るのか?—歴史から考えるポピュリズム | 慶應義塾大学出版会 |
| 松本 悠子 | 戦場に忘れられた人々—人種とジェンダーの大戦史 | 京都大学学術出版会 |
| 溝口 修平（編） | 権威主義化する世界と憲法改正 | 法政大学出版局 |
| 森 彰夫 | 主権国家体系・民族自決論を超えて—ポスト・ソブリン主義の国際政治学 | 彩流社 |
| 山田 紀彦（編著） | 権威主義体制にとって選挙とは何か—独裁者のジレンマと試行錯誤 | ミネルヴァ書房 |
| 山田 満 | 国際協力入門—平和な世界のつくりかた | 玉川大学出版部 |
| 山本 昭宏 | 変質する平和主義—〈戦争の文化〉の思想と歴史を読み解く | 朝日選書 |
| 山本 吉宣（著），三浦 聰（編集協力） | 言説の国際政治学—理論、歴史と「心の地政学」 | 東信堂 |
| 吉田 邦彦 | 先住民族・移民の民法学—ポスト・ウェストファーリア時代の行方 | 信山社 |

| | | |
|---|---------------------------------------|----------|
| 吉田 仁美 (編著) | グローバル時代の人権保障 | 晃洋書房 |
| 吉田 文彦、遠藤 誠治、佐藤 丙午、真山 全 (編著) | 核なき時代をデザインする—国際政治・核不拡散・国際法からみた現実的プロセス | 早稲田大学出版部 |
| 歴史学研究会 (編) | ロシア・ウクライナ戦争と歴史学 | 大月書店 |
| ロバート・ジャーヴィス (著)、野口 和彦、奥山 真司、高橋 秀行、八木 直人 (訳) | 核兵器が変えた軍事戦略と国際政治—核革命の理論と国家政策 | 芙蓉書房出版 |
| 脇 祐三 | グローバルサウスの時代—多重化する国際政治 | 光文社新書 |

【日本関係】

| | | |
|---------------------------------|------------------------------------|----------------|
| 麻田 雅文 | 日ソ戦争—帝国日本最後の戦い | 中公新書 |
| 安藤 正人 | 戦時国際法と帝国日本 | 東京大学出版会 |
| 安藤 優香 | 石油危機における日本の対米外交—1970年代日本の選択 | ミネルヴァ書房 |
| 池田 知加恵、新谷 卓 | 池田純久と日中戦争—不拡大を唱えた現地参謀 | 彩流社 |
| 石田 憲 | 戦争を越える民主主義—日本・イタリアにおける運動と熟議のデモクラシー | 有志舎 |
| 大木 毅著 | 決断の太平洋戦史—「指揮統帥文化」からみた軍人たち | 新潮選書 |
| 大島 明子 | 外征と公議—国際環境のなかの明治六年政変 | 有志舎 |
| 沖縄タイムス社 (編著) | 鉄の暴風—沖縄戦記 | 筑摩書房 |
| 小倉 和夫 (著)、昇 亜美子、白鳥 潤一郎、河 純珍 (編) | 駐韓国大使日誌1997-2000—日韓パートナーシップ宣言とその時代 | 岩波書店 |
| 川島 真、井上 正也 (編著) | 大平正芳の中国・東アジア外交—経済から環太平洋連帯構想まで | PHPエディターズ・グループ |
| 川名 晋史 | 在日米軍基地—米軍と国連軍、「2つの顔」の80年史 | 中公新書 |
| 黒沢 文貴 (編) | 日本外交の近代史 | 東京大学出版会 |
| 黒羽 清隆 | 日中15年戦争 | ちくま学芸文庫 |
| 纈纈 厚 | ウクライナ停戦と私たち—ロシア・ウクライナ戦争と日本の安全保障 | 緑風出版 |
| 小林英夫 | 日中戦争—殲滅戦から消耗戦へ | 講談社学術文庫 |
| 駒込 武 (編) | 台湾と沖縄帝国の狭間からの問い—「台湾有事」論の地平を越えて | みすず書房 |

| | | |
|-------------------------------------|------------------------------------|------------|
| 佐藤 史郎、川名 晋史、上野 友也、齊藤 孝祐、山口 航 (編) | 日本外交の論点 新版 | 法律文化社 |
| 澤野 雅樹 | オッペンハイマーの時代ー核の傘の下で生きるということ | 言視舎 |
| 庄司 貴由 | 日本のPKO政策ー葛藤と苦悩の60年 | 筑摩書房 |
| 慎 蒼宇 | 朝鮮植民地戦争ー甲午農民戦争から関東大震災まで | 有志舎 |
| 蘇 智良 (著)、丁 世理、董 春玲 (訳) | 日本軍「慰安婦」問題の研究ー中国各地と占領地における実態調査を中心に | アーツアンドクラフト |
| 杉山 晋輔 | 日本外交の常識 | 信山社 |
| 高橋 亮一 | 北方海域をめぐる国際政治史ー明治期日本の海獣猟業 | 日本経済評論社 |
| 高村 正彦、兼原 信克、川島 真、竹中 治堅、細谷 雄一 | 冷戦後の日本外交 | 新潮選書 |
| 土屋 礼子 | 占領期のメディアとインテリジェンス | 青弓社 |
| 津村 一史 | バチカン機密文書と日米開戦 | dZERO |
| 戸部 良一 | 日中和平工作ー1937-1941 | 吉川弘文館 |
| 中塚 明、井上 勝生、朴 孟洙 | 東学農民戦争と日本ーもう一つの日清戦争 | 高文研 |
| 西川 寛生 (著)、武内 房司、宮沢 千尋 (編) | 西川寛生「戦時期ベトナム日記」ー1940年9月-1945年9月 | 風響社 |
| 波多野 澄雄 | サンフランシスコ講和と日本外交 | 吉川弘文館 |
| 潘 亮 | 日本の国連外交ー戦前から現代まで | 名古屋大学出版会 |
| 広中 一成 | 後期日中戦争ー華北戦線 | 角川新書 |
| 玄 武岩、金 敬默、松井 理恵 (編著) | 「日韓連帯」の政治社会学ー親密圏と公共圏からのアプローチ | 青土社 |
| ベルナルト・V・A・レーリンク (著)、都築 陽太郎 (訳) | 東京裁判ー全訳レーリンク意見書 | 三省堂書店/創英社 |
| 保城 広至 | ODAの国際政治経済学ー戦後日本外交と対外援助1952-2022 | 千倉書房 |
| ボルジギン・フスレ | 日本人のモンゴル抑留の新研究 | 三元社 |
| 松浦 正孝 (編著) | 「戦後日本」とは何だったのかー時期・境界・物語の政治経済史 | ミネルヴァ書房 |
| 松田 康博、福田 円、河上 康博 (編) | 「台湾有事」は抑止できるかー日本がとるべき戦略とは | 勁草書房 |
| 宮崎 悠、柴田 晃芳、中村 研一 | 国際存在としての沖縄 | 法政大学出版局 |
| 山我 浩 | 原爆裁判ーアメリカの大罪を裁いた三淵嘉子 | 毎日ワニズ |
| 山口 航 | 日米首脳会談ー政治指導者たちと同盟の70年 | 中公新書 |

| | | |
|------------------------|---|----------|
| 山城 智史 | 琉球をめぐる十九世紀国際関係史—ペリー来航・米琉コンパクト、琉球処分・分島改約交渉 | インパクト出版会 |
| 山辺 昌彦 | 東京空襲の諸問題 | アテネ出版社 |
| 吉井 文美 | 日本の中中国占領地支配—イギリス権益との攻防と在来秩序 | 名古屋大学出版会 |
| 李 廷江（編著） | 日本と中国—歴史と現代 | 中央大学出版部 |
| ロビン・リエリー（著）、小田部 哲哉（編訳） | 日米史料による特攻作戦全史—航空・水上・水中の特攻隊記録 | 並木書房 |

【アジア・中東・アフリカ・ラテンアメリカ・オセアニア関係】

| | | |
|---|--|-----------|
| A.V.トルクノフ、G.D.トロラヤ、I.V.ディヤチコフ（著）、江口 満、下斗米 伸夫（訳） | 現代コリア、乱気流下の変容—2008-2023 | 作品社 |
| 阿部 俊哉 | パレスチナ和平交渉の歴史—二国家解決と紛争の30年 | みすず書房 |
| 飯笛 佐代子、鎌田 真弓（編著） | 移動と境界—越境者からみるオーストラリア | 昭和堂 |
| 五十嵐 美華 | 人権保障と地域国際機構—アフリカ連合の役割と可能性 | 晃洋書房 |
| 李 制勲（著）、市村 繁和（訳） | 非対称な脱冷戦1990～2020—平和への細い回廊に刻まれた南北関係三〇年 | 緑風出版 |
| 磯崎 敦仁（編著） | 北朝鮮を解剖する—政治・経済から芸術・文化まで | 慶應義塾大学出版会 |
| 磯崎 敦仁、澤田 克己 | 北朝鮮入門—金正恩時代の政治・経済・社会・国際関係 | 東洋経済新報社 |
| 稻田 十一 | 「一带一路」を検証する—国際開発援助体制への中国のインパクト | 明石書店 |
| 今村 祥子 | 統治理念と暴力—独立インドネシアの国家と社会 | 東京大学出版会 |
| 岩崎 育夫 | 現代アジアの民主と独裁—なぜ民主主義国で二世指導者が生まれるのか | 中央公論新社 |
| 岩谷 将 | 民主と独裁の相克—中国国民党の党治による民主化の蹉跌 | 千倉書房 |
| 宇佐見 耕一（編著） | ラテンアメリカと国際人権レジーム—先住民・移民・女性・高齢者の人権はいかに守られるのか？ | 晃洋書房 |
| 臼杵 陽 | 日本人のための「中東」近現代史 | 角川文庫 |
| 小山田 紀子 | アルジェリアにおける植民地支配の構造と展開—フランスの土地政策と農村社会の変容 | 明石書店 |
| 風間 計博、丹羽 典生（編） | 記憶と歴史の人類学—東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接 | 風響社 |

| | | |
|---|--|----------------|
| 金 世徳 | 韓国現代政治－中央集権から地方分権への道 | 博英社 |
| キム・ヨンスン（著）, 金 成垣、松江 晓子（訳） | 韓国福祉国家はいかにつくられたのか－民主化以降における福祉政策と福祉政治 | 明石書店 |
| 木村 可奈子 | 東アジア多国間関係史の研究－16-18世紀の国際関係 | 思文閣出版 |
| 権 憲益、鄭炳浩（著）, 趙慶喜（訳） | 「劇場国家」北朝鮮－カリスマ権力はいかに世襲されたのか | 法政大学出版局 |
| 國分 良成、日本経済研究センター（編著） | 中国ファクター－アジア・ドミノの政治経済分析 | 日経BP日本経済新聞出版 |
| 小林 知（編） | カンボジアは変わったのか－「体制移行」の長期観察1993～2023 | めこん |
| 小林 亮介 | 近代チベット政治外交史－清朝崩壊にともなう政治的地位と境界 | 名古屋大学出版会 |
| 子安 宣邦 | 可能性としての東アジア | 白澤社 |
| 近藤 大介 | 尖閣有事－中国「戦狼外交」の行方 | 中央公論新社 |
| 坂場 三男 | 歴史から読み解くアジアの政治と外交 | カナリアコミュニケーションズ |
| 佐川 徹、竹沢 尚一郎、松本 尚之（編） | 歴史が生みだす紛争、紛争が生みだす歴史－現代アフリカにおける暴力と和解 | 春風社 |
| サラ・ロ（著）, 岡 真理、小田切 拓、早尾 貴紀（編訳） | なぜガザなのか－パレスチナの分断、孤立化、反開発 | 青土社 |
| ジェイソン・K・スターンズ（著）, 大石 晃史、阪本 拓人、佐藤 千鶴子（訳） | 名前を言わない戦争－終わらないコンゴ紛争 | 白水社 |
| 重信 房子 | パレスチナ解放闘争史－1916-2024 | 作品社 |
| 柴田 直治 | ルポフィリピンの民主主義－ピープルパワー革命からの40年 | 岩波新書 |
| シルヴァン・シペル（著）, 林 昌宏（訳） | イスラエルvs.ユダヤ人－中東版「アパルトヘイト」とハイテク軍事産業「増補新版」 | 明石書店 |
| 進藤 榮一 | アジア力の世紀－光は東方から | 花伝社 |
| 靳諾、劉偉（編）, 劉琳（訳） | 民族復興の制度構想 | 樹立社 |
| 杉山 祐之 | 清朝滅亡－戦争・動乱・革命の中国近代史1894-1912 | 白水社 |
| 鈴木 早苗 | ASEANの政治 | 東京大学出版会 |
| 鈴木 啓之（編） | ガザ紛争 | 東京大学出版会 |
| 孫 犀冰 | 中国経済外交の実像－その政策と実践を中心に | 日本橋報社 |
| 関広 尚世、石村 智（編著） | スーダンの未来を想う－革命と政変と軍事衝突の目撃者たち | 明石書店 |
| 高岡 豊 | シリア紛争と民兵 | 晃洋書房 |

| | | |
|--|---|-----------|
| 高木 佑輔、伊藤 亜聖（編著） | 新興アジアの政治と経済 | 放送大学教育振興会 |
| 高橋 英海、鈴木 啓之、宇田川 彩（編） | 中東を読み解く－東大駒場連続セミナー 思想・文化・信仰の遺産 | 東京大学出版会 |
| 高畠 幸 | 在日フィリピン人社会－1980～2020年代の結婚移民と日系人 | 名古屋大学出版会 |
| 鄭 浩瀬（編著） | 革命と親密性－毛沢東時代の「日常政治」 | 東方書店 |
| 段 瑞聰（編著） | 現代中国の国家形成－中華民国からの連続と断絶 | 慶應義塾大学出版会 |
| 永田 伸吾、伊藤 隆太（編著），墓田 桂、野口 和彦、岡本 至、小田桐 確（著） | インド太平洋をめぐる国際関係－理論研究から地域・事例研究まで | 芙蓉書房出版 |
| 永野 慎一郎 | 秘密資料で読み解く激動の韓国政治史 | 集英社新書 |
| 根本 敬、粕谷 祐子（編著） | アジアの独裁と「建国の父」－英雄像の形成とゆらぎ | 彩流社 |
| ばすましり・じゃやせーな | 地政学から見るスリランカ政治－植民地支配、分離独立主義と国民統合問題、政治経済危機 | 大学教育出版 |
| 林田 秀樹（編著） | ASEANの連結と亀裂－国際政治経済のなかの不確実な針路 | 晃洋書房 |
| 比護 遥 | 近現代中国と読書の政治－読書規範の論争史 | 東京大学出版会 |
| 菱田 雅晴（編著） | 現代中国の腐敗と反腐敗－汚職の諸相と土壤 | 法政大学出版局 |
| 平井 久志 | 金正恩の革命思想－北朝鮮における指導理念の変遷 | 筑摩書房 |
| 三浦 まり、金 美珍（編） | 韓国社会運動のダイナミズム－参加と連帯がつくる変革 | 大月書店 |
| 三品 英憲 | 中国革命の方法－共産党はいかにして権力を樹立したか | 名古屋大学出版会 |
| 湊 一樹 | 「モディ化」するインド－大国幻想が生み出した権威主義 | 中央公論新社 |
| 宮田 律 | ガザ紛争の正体－暴走するイスラエル極右思想と修正シオニズム | 平凡社新書 |
| ミンシン・ペイ（著），布施 亜希子（訳） | 中国の恐るべき監視体制－独裁政治の未来 | 河出書房新社 |
| 村上 勇介（編） | 現代ペルーの政治危機－揺れる民主主義と構造問題 | 国際書院 |
| 山口大学大学院東アジア研究科（編著），浜島 清史（責任編集） | 東アジアのパンデミック－政治・経済学、法制度、観光学の視点から | 中央経済社 |
| 山口 隆 | 侵略と抵抗－上海事変と尹奉吉（ユンボンギル） | 社会評論社 |
| 鹿 錫俊 | 日中全面戦争に至る中国の選択1933-1937－「防共」と「抗日」をめぐる葛藤 | 東京大学出版会 |
| 渡辺 将人 | 台湾のデモクラシー－メディア、選挙、アメリカ | 中央公論新社 |

| | | |
|------|---------------------------|---------|
| 汪 牧耘 | 中国開発学序説—非欧米社会における学知の形成と展開 | 法政大学出版局 |
|------|---------------------------|---------|

【アメリカ・ヨーロッパ関係】

| | | |
|--|---|-----------|
| 会田 弘継 | それでもなぜ、トランプは支持されるのか—アメリカ地殻変動の思想史 | 東洋経済新報社 |
| 浅川 公紀 | 現代アメリカ大統領—選挙・内政外交・リーダーシップ | 武蔵野大学出版会 |
| 網谷 龍介（編） | 戦後民主主義の革新—1970～80年代ヨーロッパにおける政治変容の政治史的検討 | ナカニシヤ出版 |
| 新井 京、越智 萌（編） | ウクライナ戦争犯罪裁判—正義・人権・国防の相克 | 信山社 |
| 井上 典之（編著） | EUの現在地—揺らぐ法秩序の動態 | 信山社 |
| 内野 茂樹 | 新聞とアメリカ革命—初期アメリカ新聞の生成発展と建国独立闘争におけるその役割 | 書肆心水 |
| エーリヒ・ケストナー（著）、スヴェン・ハヌシェク（編）、 ウルリヒ・フォン・ビューロー、ジルケ・ベッカー（編集協 力）、酒寄 進一（訳） | ケストナーの戦争日記—1941-1945 | 岩波書店 |
| エマニュエル・ティエボ（著）、河村 真紀子（訳） | ヒトラーとプロパガンダーナチスと連合国イメージ戦争—ヴィジュアル版 | 原書房 |
| エレーヌ・カレール=ダンコース（著）、高橋 武智（訳） | 崩壊したソ連帝国—諸民族の反乱 増補新版 | 藤原書店 |
| 遠藤 乾（編） | ヨーロッパ統合史【第2版】 | 名古屋大学出版会 |
| 岡山 裕、西山 隆行（編） | アメリカの政治【第2版】 | 弘文堂 |
| 小野沢 透、肥後本 芳男 | アメリカ史—世界史の中で考える | 放送大学教育振興会 |
| 尾身 悠一郎 | 国際経済と冷戦の変容—カーター政権と危機の1979年 | 千倉書房 |
| 上村 剛 | アメリカ革命—独立戦争から憲法制定、民主主義の拡大まで | 中央公論新社 |
| 川嶋 周一 | 独仏関係史—三度の戦争からEUの中核へ | 中央公論新社 |
| 川村 陶子 | 「文化外交」の逆説をこえて—ドイツ対外文化政策の形成 | 名古屋大学出版会 |
| 紀平 英作 | 始動する「アメリカの世紀」—両大戦間期のアメリカと世界 | 山川出版社 |
| 久保 文明 | フランクリン・ローズヴェルト—ニューディールと戦後国際体制の創設者 | 山川出版社 |
| 国立国会図書館調査及び立法考査局（編） | ロシアによるウクライナ侵略をめぐる諸問題 | 国立国会図書館 |
| 児玉 昌己 | ヨーロッパ統合とは何か—EU政治研究余滴 | 芦書房 |
| 駒木 明義 | ロシアから見える世界—なぜプーチンを止められないのか | 朝日新書 |

| | | |
|--------------------------------------|---|-------------|
| 澤登 文治 | アメリカ合衆国憲法体制と連邦制一形成と展開 | 法律文化社 |
| シーン・L.マロイ（著）, 金谷 俊則（訳） | 日本への原爆投下とヘンリー・スティムソンの苦悩 | 文芸社 |
| ジャック・シュヴァリエ（著）, 藤森 俊輔（訳） | フランスという国家一繰り返される脱構築と再創造 | 吉田書店 |
| 進藤 榮一 | アメリカ・黄昏の帝国一帝国の光芒 | 花伝社 |
| ダーフィット・デ・ヨング（著）, 来住 道子（訳） | ナチスと大富豪一裁かれなかった罪 | 河出書房新社 |
| 高橋 秀寿 | 転換する戦時暴力の記憶一戦後ドイツと「想起の政治学」 | 岩波書店 |
| 田嶋 信雄 | ドイツ外交と東アジアー1890-1945 | 千倉書房 |
| 玉置 敦彦 | 帝国アメリカがゆずるときー譲歩と圧力の非対称同盟 | 岩波書店 |
| ダン・シリング、ロリ・チャップマン・ロングフリット, 峯村 利哉（訳） | 米特殊部隊CCT史上最悪の撤退戦 | 早川書房 |
| 月村 太郎（編著） | 紛争後社会と和解ーボスニアにおける国家建設 | 晃洋書房 |
| 鶴岡 路人 | 模索するNATOー米欧同盟の実像 | 千倉書房 |
| デイヴィッド・ジェフリ・チャンドラー（著）, 君塚 直隆、糸井重里（訳） | ナポレオン戦争 上・下 | 国書刊行会 |
| 永嶋 友 | 第二次世界大戦期イギリスのラジオと二つの戦争文化ーBBC、プロパガンダ、モダニズム | 慶應義塾大学法学研究会 |
| 中西 優美子 | EU基本権の体系 | 法律文化社 |
| 中山 洋平、水島 治郎 | ヨーロッパ政治史 改訂版 | 放送大学教育振興会 |
| 西崎 文子 | アメリカ外交の歴史的文脈 | 岩波書店 |
| 西山 隆行 | アメリカ大統領とは何かー最高権力者の本当の姿 | 平凡社新書 |
| 西山 隆行、前嶋 和弘、渡辺 将人 | 混迷のアメリカを読みとく10の論点 | 慶應義塾大学出版会 |
| 原田 昌博 | ナチズム前夜ーワイマル共和国と政治的暴力 | 集英社 |
| ピーター・ベイカー、スザン・グラッサー（著）, 伊藤 真（訳） | ぶち壊し屋ートランプがいたホワイトハウス2017-2021 上・下 | 白水社 |
| 廣部 泉 | 人種差別撤廃提案とパリ講和会議 | 筑摩選書 |
| 藤崎 蒼平、セルゲイ・ペトロフ | ロシア反体制派の人々 | 未知谷 |
| ブルース・J.シュルマン（著）, 北村 礼子（訳） | アメリカ70年代ー激動する文化・社会・政治 | 国書刊行会 |

| | | |
|------------------------------------|---|-----------|
| 前嶋 和弘、松本 佐保、藤永 康政、宮田 智之、松井 孝太 | 分断されるアメリカ | 宝島社新書 |
| 牧田 東一 | リベラルな帝国アメリカのソーシャル・パワーーフォード財団と戦後国際開発レジーム形成 | 明石書店 |
| 益田 実、齋藤 嘉臣（編著） | 冷戦史—超大国米ソの出現からソ連崩壊まで | 法律文化社 |
| 松戸 清裕 | ソヴィエト・デモクラシー—非自由主義的民主主義下の「自由」な日常 | 岩波書店 |
| 宮内 悠輔 | 地域主義政党の国政戦略—現代ベルギーにおける政党間競合の展開 | 明石書店 |
| 村田 晃嗣 | 大統領たちの50年史—フォードからバイデンまで | 新潮選書 |
| M.E. サロッティ（著）、岩間 陽子、細谷 雄一、板橋 拓己（監） | 1インチの攻防—NATO拡大とポスト冷戦秩序の構築 上・下 | 岩波書店 |
| 森井 裕一 | 現代ドイツの外交と政治 [第2版] | 信山社出版 |
| 森原 隆（編） | ヨーロッパの「統合」の再検討 | 成文堂 |
| 安武 秀岳 | アメリカ奴隸主国家の興亡—植民地建設から南北戦争まで | 明石書店 |
| 山本 明代 | 第二次世界大戦期東中欧の強制移動のメカニズム | 刀水書房 |
| 吉野 孝 | アメリカ政党システムのダイナミズム—仕組みと変化の原動力 | 東信堂 |
| ローレンス・リース（著）、布施 由紀子（訳） | ヒトラーとスターリン—独裁者たちの第二次世界大戦 | みすず書房 |
| 渡辺 靖 | 現代アメリカの政治と社会 | 放送大学教育振興会 |
| 和田 光弘 | アメリカは、いかに創られたか—レキシントン・コンコードの戦い | NHK出版 |

【資料】

| | | |
|-------------------------------|------------------------------|------|
| 李 承晩（著）、金 永林（訳・解題） | 李承晩「独立精神」 | 原書房 |
| 外務省（編） | 平和条約締結に伴う賠償交渉 上・下 | 六一書房 |
| 世界銀行（編著）、田村 勝省（訳） | 移民・難民・社会 | 一灯舎 |
| バラク・オバマ（述）、リサ・ロガク（編）、三宅 智子（訳） | バラク・オバマの生声—本人自らの発言だからこそ見える真実 | 文響社 |
| 牧野 邦昭（編） | 「秋丸機関」関係資料集成 第5巻-第18巻 | 不二出版 |

論文（国際政治・外交史）

【一般】

| | | |
|--------------------|---|---------------|
| 秋山 肇 | アントロポセン・AI時代における非人間と安全保障 | 平和研究62 |
| 麻生 多聞 | 「平和提言構想」と市民的防衛 | 平和研究62 |
| 阿部 竹浩 | 宇宙戦における宇宙法と武力紛争法の規範抵触 | 国際安全保障51(4) |
| 石田 淳 | 国家の安全と国民の生命・身体・財産の安全 | 平和研究62 |
| 石原 真衣 | 先住民を不可視化する暴力 | 平和研究61 |
| 上野 友也 | 正義と秩序—和平プロセスにおける女性の政治参加— | 国際安全保障52(3) |
| 上原 賢司 | 天然資源とグローバルな正義：多層的で限定的な天然資源の正義構想の意義と可能性 | 政治思想研究24 |
| 永福 誠也 | 偽情報と武力紛争法 | 安全保障戦略研究5(1) |
| 榎本 珠良 | 軍備管理・軍縮におけるジェンダー主流化の経緯と課題 | 国際安全保障52(3) |
| 岡部 みどり | リベラル民主主義国の限界と出入国管理——「南」の越境移動の現代的意義 | 国際政治212 |
| 岡部 みどり | グローバル・マイグレーション・ガバナンス再考—動態分析へのアプローチ— | グローバル・ガバナンス10 |
| 小川 玲子、清水 奈名子、佐藤 史郎 | 平和の不在において語る——平和研究のアイデンティティ再考 | 平和研究61 |
| 影山 優華 | フェミニスト平和研究を原点とする平和安全保障: ベティ・リアドンの「有機的平和 (organic peace) 」と「真の安全保障を求める女性たち (Women for Genuine Security) 」による実践 | 平和研究62 |
| 柄谷 利恵子 | 「移動」は政治学・国際政治学に何を問うのか | 年報政治学2024(II) |
| 川崎 哲 | 軍事力への依存から脱却するために | 平和研究62 |
| 木村 真希子 | だれのための平和か——国民国家、紛争と暴力 | 平和研究61 |
| 熊田 智徳 | 抑止理論の史的検討と論点整理—合理性をめぐる残された課題— | 国際安全保障52(2) |
| 笹本 潤 | 平和構想提言コメント——地域の安全保障と軍事同盟は両立可能か | 平和研究62 |
| 清水 奈名子 | 国連システムと法の支配: 主権国家体制を前提とした国際法秩序の課題 | 国連研究25 |

| | | |
|---------------------|---|---------------|
| 志村 真弓 | 中小国から見た武力行使正当化論:「意思または能力を欠く国家」 基準論を手がかりに | 国連研究25 |
| 白川 俊介 | 領土の一体性・自衛・武力行使:戦争の道義性の一側面に関する若干の考察 | 政治思想研究24 |
| 鈴木 一人 | ルールに基づく国際秩序の動搖と地経学の台頭 | 国際問題719 |
| 須田 祐子 | 情報の越境移動と主権 | 年報政治学2024(II) |
| 滝澤 三郎 | 発想の転換が求められる難民・移民問題 | 国際問題720 |
| 田中 極子 | 「女性・平和・安全保障 (WPS)」—国際安全保障の新たな視座— | 国際安全保障52(3) |
| 田村 堅太郎 | グローバル・ガバナンスの観点から見た世界の脱炭素の潮流 | グローバル・ガバナンス10 |
| デイヴィッド・アーミティジ、安武 真隆 | ガリヴァー苦悩記:近代世界の形成と破壊における条約 | 政治思想研究24 |
| 友次 晋介 | ユビキタスな放射性物質と包括的「核テロリズム」言説の登場 | 年報政治学2024(II) |
| 中束 友幸 | 国際調停におけるバイアスを解く——サーベイ実験を用いて | 平和研究61 |
| 中山 均 | 「平和研究」55号「巻頭言」の気候変動問題に関する記述への反論 | 平和研究61 |
| 西野 仁人 | 国際人道法における文民の保護の喪失と回復——「回転扉」論の国際法上の位置づけ—— | 安全保障戦略研究5(1) |
| 西村 邦行 | 国際論的転回は政治思想史を深め(てい)ない:古典的国際関係論からのポレミック | 政治思想研究24 |
| 浜 由樹子 | ユーラシア主義と「ウクライナ問題」の原点:思想の循環史の観点から | 政治思想研究24 |
| 平井 雄大 | 責任のリアリズム——坂本義和再読—— | 国際政治212 |
| 藤井 広重 | 主権国家体制と国際刑事裁判所による逮捕状:現職の国家元首に対する逮捕状執行をめぐるパラドックス | 国連研究25 |
| 堀井 里子 | 渡航管理をめぐる政治 | 年報政治学2024(II) |
| 本多 美樹 | 主権国家体制と国連:グローバル化の潮流のなかで | 国連研究25 |
| 南山 淳、和田 賢治、佐藤 史郎 | 「安全保障」という名の暴力——弛緩する本質的論争性 | 平和研究62 |
| 三牧 聖子 | 戦争違法化体制再考:それは暴力をなくすのか | 政治思想研究24 |
| 山下 ゆかり | 気候安全保障の時代 | 国際問題719 |

| | | |
|--------------|--|---------------|
| 山田 哲也 | 植民地独立と国連平和維持活動の起源から見えるもの | 国際政治213 |
| 吉田 ゆかり、岩田 英子 | ジェンダー主流化に関する一考察 一軍隊によるWPS履行を手がかりに一 | 国際安全保障52(3) |
| 和田 賢治 | セクシュアリティをめぐる国民国家の再編と国際社会の分断 | 年報政治学2024(II) |
| 渡邊 智明 | 主権国家体制の有意性を問い合わせなおす新たな環境ガバナンスの態様? 多国間環境条約と国連・UNEPによるオーケストレーション | 国連研究25 |

【日本関係】

| | | |
|-------------|---|---------------|
| 井川 充雄 | スポートニク事件と日本の世論 | インテリジェンス24 |
| 太田 宏 | 日本の気候政策とエネルギー政策—日本のエネルギー転換の政治— | グローバル・ガバナンス10 |
| 何 思慎 | 米中競争下の岸田内閣の外交と安全保障 | 問題と研究53(1) |
| 熊本 博之 | 沖縄に「平和」をもたらす「自立」の実現に向けて | 平和研究61 |
| 小橋 史行 | 陸上自衛隊の海外派遣に係る政策の軌跡と展開—冷戦終結以降、UNTAC派遣までを焦点に— | 安全保障戦略研究5(1) |
| 齊藤 拓海 | 作戦環境としての領域—安全保障関連文書から読む日本の領域に対する認識とその変化— | 安全保障戦略研究5(1) |
| 白鳥 潤一郎 | 苦悩する「経済大国」—東京サミット（一九七九年）と日本外交— | 国際政治212 |
| 鈴木 宏尚 | GATT三五条対日援用問題—自由貿易、帝国、冷戦、ナショナリズム | 国際政治212 |
| 高島 正顕、中島 信吾 | 中曾根政権期におけるペルシャ湾への人的貢献の検討—掃海艇派遣問題を中心に— | 安全保障戦略研究5(1) |
| 高橋 和宏 | 二国間と多国間をめぐる日本外交 | 国際政治212 |
| 武田 悠 | 核物質をめぐる国際協議と日本外交—国際プルトニウム貯蔵構想、一九七八—一九八二— | 国際政治212 |
| 千々和 泰明 | 戦後史のなかの2022年安保三文書改定 | 安全保障戦略研究5(1) |
| 長 史隆 | 商業捕鯨モラトリアム（一九八二年）をめぐる日本外交—IWCへの幻滅から対米交渉へ— | 国際政治212 |

| | | |
|--------|---|--------------|
| 鄭 方婷 | 日本における「経済安全保障」と脱炭素・再生可能エネルギー分野での政策推進 | 問題と研究53(4) |
| 中西 友汰 | 官邸における東南アジア外交の模索——佐藤栄作総理の一九六七年東南アジア・大洋州諸国歴訪と訪米—— | 国際政治212 |
| 畠山 京子 | インド太平洋地域秩序をめぐる日豪の多国間と二国間外交の比較——脅威の性質と地理的近接性の視点から—— | 国際政治212 |
| 花田 智之 | 情報戦としての日本陸軍の対ソ諜報活動——「情報将校の系譜」と終戦工作 | 安全保障戦略研究5(1) |
| 牧野 久美子 | 1980年代後半の日本の対南アフリカ政策—追加規制の導入過程の検討— | アジア経済65(3) |
| 松井 宏樹 | 日本の「人権外交」のこれから | 国連研究25 |
| 村上 友章 | 国連安保理非常任理事国としての日本のカンボジア外交——日タイ工作と決議七九二号—— | 国際政治212 |
| 持永 大 | 日本版能動的サイバー防御の展開と課題 | 国際安全保障52(2) |
| 諸永 大 | 湾岸危機に対する日本的人的貢献の政治的失敗と政策過程の質——政策決定者の歴史の教訓と行政組織の政策機能—— | 安全保障戦略研究5(1) |
| 山口 昌也 | 大正期における海相財部彪と機関科士官の待遇問題 | 安全保障戦略研究5(1) |
| 山口 真人 | GATT三五条援用撤回問題と日英通商航海条約——対日貿易差別をめぐる日英外交一九五九—一九六二—— | 国際政治212 |
| 山本 昭宏 | 1957年の日本における「スポートニク事件」の社会的受容に関する一考察 | インテリジェンス24 |
| 楊 名豪 | 日本の海洋政策推進体制における「参与会議」の展開と課題 | 問題と研究53(1) |
| 溜 和敏 | 現代日印関係におけるグローバル・サウス | 国際問題718 |
| 若月 秀和 | 冷戦終結過程での日本の対中外交——多国間外交の文脈のなかで—— | 国際政治212 |
| 渡辺 広樹 | 1971年の米海軍横須賀基地返還中止を巡る米軍部の再決定 | 国際安全保障52(3) |

【アジア・中東・アフリカ・ラテンアメリカ・オセアニア関係】

| | | |
|-------|-----------------------|----------|
| 青木 健太 | 中東ユーラシアの視点から見たBRICS拡大 | 中東研究（別冊） |
|-------|-----------------------|----------|

| | | |
|--------|---|-------------|
| 青木 健太 | ターリバーンの女性政策の背景——アフガニスタンの宗教・社会・文化的要因を手がかりに | 中東研究551 |
| 青木 健太 | イラン「抵抗の枢軸」の具体的様態——革命防衛隊と「抵抗の枢軸」諸派との関係性を中心に | 中東研究550 |
| 青山 弘之 | シリアにおける越境(クロスボーダー)人道支援：人道性と政治性 | 国際情勢94 |
| 新井 京 | ガザ攻撃が照らす国際人道法の課題 | 国際問題722 |
| 池端 蘿子 | ガザ危機が揺るがすヨルダンの安全保障——2023年10月7日以降のパレスチナ問題対応 | 中東研究551 |
| 石井 由梨佳 | 船舶を防護する権利：紅海危機における各国の対応を手がかりに | 国際問題722 |
| 伊豆山 真理 | マイク・イン・インディア—防衛装備国産化への試行錯誤— | 国際安全保障51(4) |
| 伊豆山 真理 | 安全保障から見たインド・中国関係の現在 | 国際問題718 |
| 磯崎 敦仁 | 冷戦期におけるベトナムのインバウンド：日本人観光客の受け入れを中心に | 国際情勢94 |
| 伊藤 弘太郎 | 韓国防衛産業躍進の成功要因と国際社会への影響 | 国際安全保障51(4) |
| 伊藤 和歌子 | デジタルシルクロードは中国的価値観の普及・拡大ツールとして機能しているか | 国際政治213 |
| 伊藤 融 | 岐路に立つインド外交：モディ政権下の10年の評価と課題 | 国際問題718 |
| 今井 宏平 | トルコの防衛産業—発展の歴史と実戦での成果を中心に | 国際安全保障51(4) |
| 今井 宏平 | アフリカ諸国で急拡大するトルコのドローン兵器——その思惑と実態 | 中東研究552 |
| 上野 祥 | 抑圧のミスマッチ——2000年代後半のエジプトにおける政治的抑圧と抗議行動—— | アジア経済65(1) |
| 上村 司 | 世界情勢の変化と中東の行く末——ガザ危機から見えるもの | 中東研究550 |
| 黄 偉修 | 台湾における大陸政策決定過程の構築と国家安全保障政策—総統の権力行使という視点から | アジア研究70(3) |
| 越智 萌 | 国際刑事裁判所(ICC)によるイスラエル、ハマス両指導者に対する逮捕状請求に関する法的問題：管轄権および補完性制度に関する現行法と理念 | 国際問題722 |
| 河西 陽平 | 朝鮮戦争初期における共産圏諸国のインテリジェンスと問題点 | 国際情勢94 |
| 笠井 亮平 | インドの多面的外交——INSTCとBRICSに対する姿勢から | 中東研究（別冊） |
| 金子 真夕 | トルコのBRICS加盟戦略－多極化を目指す背景と課題 | 中東研究（別冊） |

| | | |
|--------|---|--------------|
| 金子 真夕 | ガザ危機とトルコー独自の外交姿勢は国際関係に何をもたらしたのか | 中東研究551 |
| 川岸 伸 | イスラエルによるガザ侵攻とJus ad Bellum | 国際問題722 |
| 神田 洋 | 民主々義は野球から: 米国発プロパガンダの受容 | インテリジェンス24 |
| 金 ゼンマ | ルールセッターは誰か?—国際秩序の再構築をめぐる日米中の角逐— | 国際政治212 |
| 草野 大希 | イラク戦争前後における米国主導のリベラル国際秩序の変容 | 国際安全保障52(1) |
| 草野 大希 | イラク戦争前後における米国主導のリベラル国際秩序の変容 | 国際安全保障52(1) |
| 小針 進 | 韓国社会における「外交的欠礼」と「国格」をめぐる言説 | 国際情勢94 |
| 酒井 啓子 | イラクにおける「抵抗の枢軸」: 対ガザ戦争対応に反映される権力抗争 | 中東研究551 |
| 佐藤 幸人 | 台湾—グローバル化のなかの半導体製造の集中と脱グローバル化における強いられた分散 | アジア研究70(4) |
| 佐藤 隆広 | ナレンドラ・モディ政権下のインド経済と経済政策 | 国際問題718 |
| 佐橋 亮 | 米中対立とアジア・国際秩序の将来ー対峙するインド太平洋システムと中国 | アジア研究70(4) |
| 吉田 靖之 | 海洋空間における非国際的武力紛争と国際法ー中台武力紛争を想起してー | 国際安全保障52(3) |
| 清水 一史 | グローバリゼーションの行方と東アジア経済統合 | アジア研究70(4) |
| 志村 真弓 | 対リビア武力行使の国際法的根拠の変化と多重化—「住民保護」から「テロ掃討」へ | 平和研究61 |
| 徐 遵慈 | 台湾のCPTPP加入申請による日台農産物貿易強化への機会と展望 | 問題と研究53(4) |
| 庄司 智孝 | 「南シナ海の領有権問題」再訪ーー米中対立の中の東南アジアーー | 安全保障戦略研究4(2) |
| 城山 英巳 | 「国家安全」 時代の中国ナラティブ外交ー習近平が目論む国際秩序ー | 問題と研究53(2) |
| 神宮司 覚 | アフリカにおけるクーデタの再来と対テロ戦争 | 安全保障戦略研究4(2) |
| 杉浦 康之 | 中国共産党第20回全国代表大会における国防政策方針と中国人民解放軍上層部の人事動向 | 安全保障戦略研究4(2) |
| 鈴木 隆 | 台湾有事と「東アジア近代史の総決算」の可能性: 台湾統一をめぐる習近平の政論 | 国際情勢94 |
| 鈴木 恵美 | エジプトにとってのガザ戦争 | 中東研究551 |
| 鈴木 啓之 | ガザと中東和平: 現状と今後の見通し | 中東研究550 |
| 関 颯太 | 転換点としての2024年トルコ統一地方選挙ー野党躍進の要因と政治的影響 | 中東研究551 |
| 高尾 賢一郎 | サウジアラビアのグローバル・サウスへの関心と第二次トランプ政権 | 中東研究(別冊) |

| | | |
|--------|---|------------|
| 高尾 賢一郎 | サウジアラビアはイスラエルと国交正常化するのか | 中東研究551 |
| 高尾 賢一郎 | アンサールッラーは「抵抗の枢軸」なのか—イエメン戦争とガザ戦争の交差 | 中東研究550 |
| 高岡 豊 | 「抵抗の枢軸」とシリア | 中東研究550 |
| 高橋 雅英 | UAE、エジプトの動向、及び、エネルギーへの影響 | 中東研究（別冊） |
| 高橋 雅英 | UAEの対アフリカ関与の展開 | 中東研究552 |
| 高橋 雅英 | UAE のクリーンエネルギー政策と天然ガス産業 | 中東研究551 |
| 高橋 雅英 | エジプト・シーシー政権の3期目の課題—周辺地域情勢からの影響と湾岸諸国の経済支援 | 中東研究550 |
| 竹中 千春 | グローバリゼーションとその反転を操るイリベラル・デモクラシー・グローバル・インドの立ち位置 | アジア研究70(4) |
| 玉田 大 | パレスチナ紛争と国際司法裁判所：対イスラエル訴訟の意義 | 国際問題722 |
| 千坂 知世 | イラン革命勢力とパレスチナ：関係構築過程とガザ危機を経た現状 | 中東研究551 |
| 中馬 瑞貴 | BRICS拡大に期待をかけるロシア | 中東研究（別冊） |
| 張 婷婷 | 貿易による平和：ロシア・ウクライナと中国・台湾の比較分析 | 問題と研究53(4) |
| 辻田 俊哉 | イスラエルの対アフリカ関係：対外政策の目的とその評価に関する検討 | 中東研究552 |
| 寺田 貴 | インド太平洋地経学：ソフトとハード、近接性と近似性の2つの視点から読み解く | 国際問題719 |
| 長沢 栄治 | パレスチナ人三重苦の構造と中東諸国体制—「10・7反乱」の歴史的位置づけを考える— | 中東研究551 |
| 中西 嘉宏 | 戦うか、逃れるか、困窮か：ポスト・クーデターのミャンマーと「人の移動」 | 国際問題720 |
| 中西 久枝 | イランのBRICS加盟とイラン・ロシア包括的戦略的パートナーシップ協定 | 中東研究（別冊） |
| 中西 久枝 | イラン・アゼルバイジャン関係の変化と中東ユーラシア地域の回廊構想 | 中東研究550 |
| 錦田 愛子 | イスラエル・ガザ戦争から見るパレスチナ難民問題：閉ざされた国境とUNRWA解体論 | 国際問題720 |
| 錦田 愛子 | パレスチナ抵抗運動の歴史と新たな展開—「ナクバ」から「10.7」へ至る道程— | 中東研究550 |
| 萩原 優太 | イラクにおける「イスラーム国」の地域別現状と活動傾向 | 中東研究552 |

| | | |
|-------------|---|--------------|
| 平川 幸子 | インドネシア、タイ、マレーシアのOECD/ BRICS加盟問題—外交の伝統、対中関係、国内政治の視点から— | 問題と研究53(4) |
| 福田 賀 | イラク戦争と米国の国防戦略 | 国際安全保障52(1) |
| 福田 円 | 中ソ国交正常化と台湾—新たな「台湾問題」と「一つの中国」レジームの形成 | 現代中国研究52 |
| 古谷 修一 | イスラエル・パレスチナ紛争に国際法は何ができるか? | 国際問題722 |
| 米 多 | 1950年代後半における中華民国の大陸反攻戦略の変容—グローバル冷戦と国内社会情勢の視点から— | 安全保障戦略研究4(2) |
| 堀本 武功 | 台頭するインド:過去・現在・将来の展望 | 国際問題718 |
| 松尾 昌樹 | 湾岸アラブ諸国研究の新潮流は生まれるか | 国際政治213 |
| 松村 史紀 | スプートニク事件をめぐる中国の公式報道と宣伝 | インテリジェンス24 |
| 松村 史紀 | 中ソ同盟における北京の自立過程—現代東アジア国際政治の原風景 | 現代中国研究52 |
| 松本 いく子 | マーシャル諸島核実験被害者と太平洋非核独立運動:キリスト教諸派組織(PCC・WCC)の協力を中心に | 平和研究62 |
| 松本 武祝 | 植民地朝鮮における水利組合の組織運営に関する事例研究—古阜水利組合を対象として— | アジア経済65(2) |
| 溝渕 正季 | 序論 イラク戦争が遺したもの | 国際安全保障52(1) |
| 溝渕 正季 | アラブ諸国の武器市場と防衛装備品国産化の動向—サウジアラビアとUAEを中心には— | 国際安全保障51(4) |
| 溝渕 正季 | 激動の中東地政学と「抵抗の枢軸」陣営の弱体化 | 中東研究(別冊) |
| 溝渕 正季 | レバノン・ヒズブッラーと西アフリカにおけるシーア派ディアスポラ・ネットワーク | 中東研究552 |
| 溝渕 正季 | レバノン・ヒズブッラーと「抵抗の枢軸」 | 中東研究550 |
| 三船 恵美 | 中国外交におけるBRICS拡大と中東 | 中東研究(別冊) |
| 武藤 亜子、梶谷 恒孝 | 適応的平和構築と国連システム:シリア紛争とイエメン紛争を事例に | 国連研究25 |
| 山尾 大 | よちよち歩きのリバイアサン—イラクの国家建設はなぜ失敗し、いまだに進捗をみせないのか— | 国際安全保障52(1) |

| | | |
|------------|---|--------------|
| 山尾 大 | イラクにおけるPMUの拡大と軍事・政治戦略 | 中東研究550 |
| 山崎 周 | 自由で開かれたインド太平洋（FOIP）構想下の日本の対フィリピン防衛協力——日比関係の新章としての準同盟の萌芽—— | 安全保障戦略研究4(2) |
| 山崎 周、中川 大雅 | 2022年以降の日韓関係改善と両国関係の構造的变化：5つの分析レベルからの考察 | 問題と研究53(4) |
| 山本 健介 | 再駆動するパレスチナ政治－ガザ戦争の陰で進む党派和解の動向－ | 中東研究552 |
| 山本 章子 | 対台湾武器売却をめぐる1980年代初頭の米中関係 | 問題と研究53(1) |
| 吉岡 英美 | グローバリゼーションと韓国半導体産業－企業戦略と産業政策の展開 | アジア研究70(4) |
| 吉田 智聰 | サウディアラビア・UAE二国間関係の二面性——イエメン内戦と強国化政策を巡る競合主体化—— | 安全保障戦略研究4(2) |
| 吉田 智聰 | イエメン南部分離主義の系譜と南部移行会議の戦略——イエメン内戦の第三極に至る道程—— | 安全保障戦略研究5(1) |
| 吉田 修 | グローバル化と「民主主義の最先進国」インド | 国際問題718 |
| 渡邊 武 | 防衛産業に見えるリアリズムと非リアリズム | 国際安全保障51(4) |
| 渡辺 理子 | A S E A Nのミャンマー問題への対応——「自律性の希求」の観点から—— | 国際政治213 |
| 渡辺 司 | アルジェリアの対アフリカ外交——サヘル紛争と西サハラ紛争を軸に | 中東研究552 |

【アメリカ・ヨーロッパ関係】

| | | |
|--------|---|---------------|
| 池本 大輔 | 排外主義的EUの誕生?：欧州議会選挙とその後 | 国際問題721 |
| 石山 徳子 | 越境するセトラー・コロニアリズムへの抵抗——アメリカ先住民族によるパレスチナ連帯への動き | 平和研究62 |
| 市川 順 | 国際気候変動交渉におけるEUのリーダーシップ——コペンハーゲンでの失敗とパリからの再出発—— | グローバル・ガバナンス10 |
| 伊藤 頌文 | 西欧安全保障における「包括化」の胎動と普遍的価値——1970～80年代の地中海情勢を焦点に—— | 安全保障戦略研究4(2) |
| 井上 麟太郎 | 戦後米国の西側防衛戦略とアジア太平洋における同盟体制——米軍とANZUS条約策定過程—— | 国際安全保障52(1) |
| 岩間 陽子 | 欧州議会選挙後のEU：中心の空洞化を克服できるか | 国際問題721 |

| | | |
|------------|--|-------------------|
| 上原 良子 | マクロン後に向かうフランス | 国際問題721 |
| 植村 充 | EUによる国際刑事裁判の追求とその含意：ウクライナにおけるロシアの戦争犯罪追及の実践から | 日本EU学会年報44 |
| 梅川 健 | 2024年アメリカ大統領選挙と移民政策 | 国際問題720 |
| 大津留（北川）智恵子 | 境界線に投影される国際秩序の二面性 | 国際政治213 |
| 大矢根 聰 | トランプ・バイデン政権の対中半導体紛争——相互依存の武器化と粘着性 | 国際政治213 |
| 小尾 美千代 | 分極化するアメリカにおける脱炭素化とグローバル気候ガバナンス | グローバル・ガバナンス 10 |
| 粕谷 真司 | サッチャーにとってのチャーチル：外交演説を手がかりに | 国際情勢94 |
| 川嶋 隆志 | 米軍におけるWPS（女性・平和・安全保障）導入——豪国防軍におけるWPS推進要因からの分析—— | 国際安全保障52(3) |
| 菊地 茂雄 | ネットワーク化戦力にとってのミッションコマンド——近年の米海空軍のドクトリン・作戦コンセプトとの関係を中心に—— | 安全保障戦略研究4(2) |
| 木村 ひとみ | ウクライナでのエコサイド（環境犯罪）をめぐるEU法の挑戦：国際刑事法への貢献とグリーン復興協力への示唆 | 日本EU学会年報44 |
| 倉科 一希 | 複数の分岐点としてのドイツ統一 | 国際政治212 |
| 小南 有紀 | 英米「特別な関係」とレバノン駐留多国籍軍——対米協力をめぐる英国の苦悩、1982-1984年—— | 国際安全保障52(2) |
| 小南 有紀 | サッチャー政権の外相たち：1980年代のイギリス外交 | 国際情勢94 |
| 佐々木 卓也 | アメリカ外交の長期的展開・変容と国際秩序 | 国際政治213 |
| 佐竹 壮一郎 | 子どもの参加をめぐる欧州委員会の取り組み——2006年以降の動向を中心に—— | グローバル・ガバナンス 10 |
| 清水 謙 | 2024年の欧州議会選挙とスウェーデン：選挙結果の分析と今後の展望 | 国際問題721 |
| 助川 康 | 文官・軍人一体型国防省の意思決定——イギリス国防省における対イラク軍事的オプションの選択—— | 安全保障戦略研究4(2) |
| 鈴木 一人 | スポートニクショックとは何だったのか | インテリジェンス24 |
| 角南 篤 | 先端科学技術をめぐる米中霸権争いと新たな国際秩序の形成 | 国際問題719 |

| | | |
|--------|---|---------------|
| 瀬戸 崇志 | 民主主義国家の「サイバー軍」による攻勢的サイバー作戦能力の整備と運用——米軍とオランダ軍における「二重の統合」の過程に着目した比較事例研究—— | 安全保障戦略研究4(2) |
| 仙石 学 | ヴィシェグラード諸国における2024年欧州議会選挙 | 国際問題721 |
| 大道寺 隆也 | ロシア・ウクライナ戦争と避難民：受入や支援の持続可能性 | 国際問題720 |
| 高島 亜紗子 | 時代の転換点(Zeitenwende)後のドイツはどこに向かうのか | 国際問題721 |
| 竹森 俊平 | 根深い国内分裂のディレンマと米国の国際指導力 | 国際問題719 |
| 塚本 勝也 | 米国における特殊作戦部隊の組織的基盤の形成——ベトナム戦争から対テロ戦争までを中心に—— | 安全保障戦略研究5(1) |
| 富浦 英一 | 米中新冷戦に向かう世界貿易とGVCの組み替え | 国際問題719 |
| 友次 晋介 | 心理戦としての「平和のための原子力」に対するスパートニク危機の影響 | インテリジェンス24 |
| 中津 俊樹 | バチカン・中国関係の展開をめぐって——「原則」と「一致」のあいだで—— | アジア経済65(1) |
| 永見 瑞木 | 「グローバルな視座」は政治思想史に何をもたらすか？：アメリカ建国を見つめる同時代フランスの議論 から考える | 政治思想研究24 |
| 中山 裕美 | 移民問題をめぐる互恵的制度構築に向けたEUの試みと限界 | 国際問題720 |
| 新福 祐一 | 1980年代後半におけるアメリカ陸軍の低強度紛争の認識と取組み——「平時不測事態作戦」の概念と適用を中心に—— | 安全保障戦略研究5(1) |
| 西田 竜也 | 「リベラルな国際主義」の変容と新冷戦2.0 | 国際政治213 |
| 西山 隆行 | アメリカの対外政策の変容と国際秩序 | 国際政治213 |
| 根岸 董 | EU移民統合政策における対話の場の創出——欧州統合フォーラムの再検討 | 日本EU学会年報44 |
| 原田 豪 | 欧州司法裁判所が引き起こすEU制度変化の動態—ポジティブ・アクションを巡る条約改定を事例として— | グローバル・ガバナンス10 |
| 廣瀬 陽子 | リロカンティ：ロシアの新しい移民：南コーカサスの事例を中心に | 国際情勢94 |
| 福原 優策 | 欧州における記憶の政治——2019年欧州議会決議の分析—— | スラヴ研究71 |
| 藤木 剛康 | ロシア・ウクライナ戦争と国際秩序—アメリカの霸権と2つの地域秩序 | 現代中国研究52 |
| 前嶋 和弘 | バイデン政権の東アジア外交の現状：2021-23年の動きを中心として | 国際情勢94 |
| 政所 大輔 | ロシアによるウクライナ侵攻と「保護する責任」—国際規範の視点から— | 国際安全保障51(4) |

| | | |
|--------|---|---------------|
| 三島 武之介 | 二つの「一つの世界」——ローズヴェルトの「平和連盟」とウィルソンの国際連盟 —— | 国際政治213 |
| 溝渕 正季 | なぜ米国はイラクに侵攻したのか?——開戦事由をめぐる論争とその再評価 | 国際政治213 |
| 三牧 聖子 | 内側から侵食される「リベラルな国際秩序」 | 国際政治213 |
| 宮本 聖斗 | ロシア制裁をめぐるEUの外圧の限界と可能性——セルビアを事例に—— | グローバル・ガバナンス |
| 山岡 陽輝 | 英国とドイツにおける解放党の活動 | 国際情勢94 |
| 湯浅 剛 | 現代ロシアとシティズンシップ | 年報政治学2024(II) |
| 吉沢 晃 | 国家補助規制の分野における欧州委員会のパンデミック対応: 危機によって政策形成過程はどう変容したか | 日本EU学会年報44 |
| 龍 花務 | 店頭デリバティブ取引規制と英国外交: 『市場の分断』の危機克服を目指した英國・日本の役割を中心に | 日本EU学会年報44 |
| 渡辺 広樹 | 政治問題化する新型SLCM-N: 米国内の対立と軍人の見解 | 国際情勢94 |